北斗七星と海蛇

つりたくにこ

短編童話集
作画 K.T

ー 北斗七星と海蛇 ー

見えるものといえば体中口だらけの魚とかいやらしくくねる魚とか、波音も無く沈黙し切った透明な闇だけという深い暗い海底にその海蛇は住んでいました。

光るものといえばちょうちんあんこうのほの暗い消えそうな電球だけで、海蛇はそんな明りでもよく追っかけたものでした。でも近くへ行くとその醜さたがっかりするのが常でした。

ある日 海蛇は たまらなく息苦しくなりました。体中に重圧がかかったようで呼吸すら出来ないのです。

おしつぶされそうに感じながら夢中で もがきながら上昇してゆきました。上へ行くにしたがって体がだんだん楽になってきました。

大きな息を一つして背のびをしたら急にぼしゃりという聞いたこともない音がして ひんやりと すがすがしい 今まで知らない処へ脱け出ました。

海蛇は海面へ出たのでした。

それは夜でした。海蛇の目の前
の空に七つの星が縦断して輝や
いていました。海蛇は、こんな
に美しいものを見たのも体が軽
くなったのも生れてはじめてで
した。
あんまり毅然と光を放ち輝や
いていましたので 感激で
気を失いそうになった程でした。

瞬間 見震いした後
あの星に会いに行こう、とりわけ一番下の
一ばん大きく よく輝く星に、
海蛇はそう思いました。
それて はじめて少女らしい微笑を
浮かべました。 海蛇は風に
聞いた話 北という方向、へ行けば
会えるものと信じていました

大きく光る星は水平線のすぐ上でかがやいていました。
海蛇は、星を頼りに遠くへ遠くへ まっすぐに
力いっぱい海面を打ちながら進んで行きました。
北へ行けば 手の届きそうな、声のとどきそうな所へ行きつくにちがいない。
海蛇は だから、水が冷くなり、肌がひりひり痛んでも それだけ近づいたと思うと嬉しくなるのです。星も光を増してくるように思えました。

昨日は 流氷にぶつかりそうでした.
身をかわした時に やけどしそうに冷たく感じました. 海蛇は
北の果ての海へついたことを知りました.
頭上には まばゆい 目を射るらい光りを放つ七つ星が並んでました.
海蛇は 真心をこめて星に よびかけました. 北の極の はりつめた
空気を 悦びと希望が入り混った声が 破りました.
でも 返事はかえってきませんでした.
海蛇は もっと声を大きくして呼びかけました. またもう一度呼びかけました

でもなんということでしょう
北斗七星はやっぱり無言
何事もないように輝いていました
何度も何度も海蛇は呼びかけて、しまいにはそれが悲鳴になりました。
けれどやっぱり美しい星は無表情でありました。
海蛇は、落胆してしまって沈みそうになりました。すっかり疲れてしまいました。
力なく星を一度見てつぶやきました。

ーもうあの暗い海底へ帰る気はないのです。ー

静かでした。星の光だけが生けるものでありました。
ーーだったらーー と、海蛇は思いました。
ー[illegible]ここにいよう。ずっと
ここに居よう

まもなく凍りついてしまった海蛇は
氷のような海面に力なく浮かんで
いました. 意識が遠のく時 それは
幸せな気持でした. 今は無言の
北斗七星のまたたきに対して海蛇
も黙って見つめかえしています. そして
海蛇と一番よく光る星を軸にして
他の六つの星はまわりを ゆっくり
回転しています.

魔法使いが、Rを拾ってきた
のは もう何年前になるでしょう。
垢まみれで、人の目を恐がって
食べものばかり ひもじい思い
して 盗んでたRを 魔法使い
は自分の家へ連れて帰った
のです。

今ではRは、とても美しい娘に
成長しています。
ありません。魔法使いはこの娘
を誘拐したことを悔いていませんで
した。Rは
からでした。

ところが ある日 何年か前の男そっくり
な赤い女の子をつれて、何年か前
Rと魔法使いが歩いてきた道を、同じ
ように こちらへ来るではありませんか。
そっくりそのまま その女の子は昔のR
でした。

Rは　赤い女の子をみたとたん
とても不安になりました。
いったい　あたしは　どうなるので
しょう、　とぼんやり頭が重く
なるのです。じっと待っている
ことなんて　できません
でした。

この子こそが本物の、望み通りのRになれるのだし、つまりは本物のRなのだ。

水晶球の占いで魔法使いはよけい確信を深めました。予想通りだ。今の私の及びもつかない知的な美しいRが写ったのでした。

Rには何が待っているのかまだぼんやりとしか分かりませんでした。

お前は失敗作なのだ。どこへでも去るがよい。
私は今度こそこの手で思い通りに美しく毅然としたRに創りかえるのだ。
魔法使いはその手でRがそばに居ることを知っても聞き入れずRを追放してしまいました。

泣く泣くRは去りました。
Rはもう Rじゃないのです。
魔法使いのそばにいるのが
本物のRで、そのRは今の
Rとまったく違ったに何物か
成長しているでしょう。
今のRは存在しないはずの
不岡となったRなのです。
一体Rは何なのでしょう
いっそ露(つゆ)となって消えましょうか。

のぞき穴
さな時から 僕のまわ
りにはいつも見知らぬ
おじさんがいて、僕の
ノートをとり保存して
いるのです。

ういうものすべて 毎日毎日
朝の目覚から夜眠っている間中も
ずっと観察し、一つのこらず書類を
作っているのです。

僕の著作を一つ残らずかきあつめた書籍
は膨大な山となっており、一度かかれたまま
二度とめくられることなくちりにうずもれ、僕の
死と共に無意味に焼かれ、僕の死体
もこの書籍を灰となって

THE END
胸にエンドマークを
はりつけたおじさんは黒いマントをひら
ひらさせて やっと僕から遠ざかる.

— タマゴ3題 —

I 黒いタマゴ と 白いタマゴ

ある日 ある時 たまたま たまごが2つ
テーブルの上

どちらが先に喧嘩をふっかけたのか
けんけんごうごうの大口論.
たいくつしていたカップやティーポットが
見物人に加わって. ますます後へはひけ
ないんだ.

「やいやい てめえ タマゴのくせに まっ黒け
とは、あんまし生い気 なまたまご」
「おまえの白いのはもう時代遅れの
しろものよ. これからは黒いたまごが
本流さ. つんつるてんの まっ白けは
若造みたいでみっともないやい」

「言ってくれたね くろくろ野郎
えらそうな口きいたとて、どうせ
てめえはころがるしか能のない
卵の型、手も足もない卵野郎」
「おまいさんは その上に あいそもな
らぬ 非個性の まっ白けの、
のっぺらぼー。逆立ちしたって
この黒いおれさまにはかなうまい」

「やいやいてめえは 黒黒と
尊大ぶって物言うが、中味は
何かい？ ルネマルグリット描く
ような風景でも内蔵してると
いうのかい。 あいも変らぬ
黄味と白味がつまってるだけよ」

「おれさまの 黄味は 紫色で
てめえのより でっかいのだ」

ここのタマゴはそうやって こずり合った
ので しまいには 大きくひびが入ってしまいました。

ひびの入った2コのタマゴは
さっそく つまみ あげられて.
テーブルのかどで たたき割られ
仲良く一つの目玉焼にされ
ました. どっちの卵も うりふたつ
仲良く 仲良く 目玉焼

♪修♪

Ⅱ　タマゴの森

八百屋やマーケット、台所や食器ケースから、自分の哀れな末路を予感している卵達がいるんです。ゆでたまご、厚焼、卵丼、オムレツ、目玉焼と蒸たり焼いたり食われたりの運命から逃れるチャンスを彼らはいつもうかがっているのです。全く殊勝な卵はポットに入れられてもいいお茶だなんて思ってるうちにていよくまるゆでにされてしまうんです。でも彼等はけっしてそんなヘマをおかしません。

でも
途中の困難を思って逃げだせない
卵達が大半なのです。

棚から落ちる時 からが壊れる危険
自動車や人にふみつぶされる危険
カラスにつつかれる危険 etc. etc.
こんな困難にもめげず ころころ
ころがりつづけた卵だけが出世を
し遂せるのです。

でもこの森へつくと卵達はもうほっとして、体をへなへなさせて眠ります。そしてのんびりと日を送ります。

木々のあいだでひなたぼっこした、緑のやはらかな草の上をころがったり、早朝霧で体をひんやりさせたりしてのん気に暮すのです。この森へ行くとそんな卵達がうっとりした表情で草の上をごろごろしています。一寸気味悪いですね。

—終—

Ⅲ レクレーション

この地方の卵達が年に一度集って、たのしい大にらめっこ大会を開きます。それはというのはそのばかりが一対一の勝ちぬきにらめっこをやるのですよ。

押すな押すなでテラスにならび真中で向い合った2つの卵が真剣な面持ちでにらめっこする順番を待つのです。卵達は、胸をわくわくさせて、この大会に参加するのです。

これが その時の記念写真です.

最前列左 今年度優賞者 右. 昨年度優賞者

後列 全参加者.

ふろく

赤い花影の小娘

おやしきの
赤い花影に小娘の蛇がいて
その蛇は万葉集の一つの歌だけを
知っていたのです それは
稲つけば かがる吾が手を
今宵もか 殿の若子が取りて
嘆かも.

というものですが、この歌をいつも
胸におもってはうっとりしているのです.
はした女の かがる(あかぎれした)手
を とっては嘆くという やさしい若様
を想像しては一人でえつに入ってい
るのです.

ところで このおやしきにも
若様が一人居て、小娘は
それを思い出すと すごさ
ま.

自分もこの歌のように情を通じて
ねんごろな仲になりたいもの
だと考えました。
でも次に若様の風貌
を思い出して げんなり
してしまいました。
過物の栄養取りすぎの
肥満体で食べかすの
いっぱいつまった黄色い歯
だして下品に笑い
おまけにスマイルバッチを
つけて金ぴかのスマイル
マークのある車を乗りまわすのです。
犬といえばグレート・デーンなんかだと自分が
見劣りするのを計算してかずん胴のダックスフンドなのです。

たいていのことなら都合の良いように美化してしまう小娘の脳も
これではどうにもならないとあきらめて 断念しないわけにはいきませんでした。
つまらない世きに住んだ不幸を嘆きましたとて。

♦ ある女の子の話 ♠
病気でもないし どこといって悪くも
ないのに 一日中 部屋に閉じこ
もって ぶらぶらしている
女の子がいました.

が焼けただれ なにもかも
いっしょくたに るつぼと化

一日中　女の子が部屋の中で
何をしているかといえば
玉のりしたり、人形ごっこしたり
一人独言ったり　歌ったり
海を呼びよせたり、空中を
旅だりしてるのです。
こうやっている間　世界の出来事
なんて全く関係ないのです。
でも　この女の子は　いつも外
が気がかりなのです。

'それは　ドアの向うがわ、ふいと
外から突然'彼方から今ここへと
急激に押し寄せるものだ'と
感じているからです。いつもこの
女の子がドアをぴったり閉じて
いるのはそのせいなのです。

ある日 夢をみました
ピンク色の顔した
猿のような人が女の子に言いまし
私は水平線を一度
ことがないのです。
じゃ一緒についていらっしゃ
見せてあげましょう。
女の子は海の上を走って
さあ これが水平

夜 ねむっていると 女の子は自分が
宇宙を流星のように すごいスピード
で飛んでいるのを感じます.
急に加速度が加わったり下降する
時は気分が悪くなります. ゆっくり
おちる時は逆に上方へひっぱら
れるようで不快です.
赤や青い星々が接近し.
遠ざかり ぼんやりした光を
放っていました. 側で きらきら
する流星がとび去り.
暗い宇宙は続きます

そういう旅行をした後の
目覚というのは 大へん疲れていて
熱っぽく汗ばんでいるのです.

不思議なことに この女の子は自分が
死ぬということを考えてみたこともありま
でした。気がかりは彼方から今すぐここへ
ってくる崩壊でした。けれど 現れて
いた夕焼けはただ不穏な傷
だけを約束し 思ってもみな
かった死がすぐそ
たのです

女の子にとって それは文字通りの自然な日常的なことの
ようにおもわれました。明りが女の子の遠い道を案内していました。
大地の彼方 涙しか宇宙に流れ落ちる処まで。死者の国まで
ずっとずっと。歩いてゆけばいいのです。

幼いうじむしぼうやは思いました
あんな ごろごろんした ぶったい色の虫が きれいなすてきな蝶々さんになるのなら、僕は小さくて ぴかぴか光る黄金の木葉蝶になるにちがいない と。
だって僕は こんなにかわいく 透るような ひふの色をしているんだもの。

これこれせがれ。　とある日
見知らぬ虫が うじむしぼうやを呼びとめました
わしが 実際の お父さんだ。お前も大きくなったら
わしのようにでっかく脂ぎったぎんばえにおなり

そう言い残して羽音をうるさく飛びさりました

※後日談　うじ虫ぼうや は　そのショックの
あまり ニヒリストになったとさ。

北斗七星と海蛇
1988年12月1日
著　者　つりたくにこ
発行者　高橋直行
〒171 東京都豊島区要町1～51
電　話　03-957-0927
製　作　㈱ 青林堂
〒101 東京都千代田区神田神保町1～62
電　話　03-291-2495・9556